

1-R-3

幼児期における運動遊びの発生運動学的研究

近藤みづき¹⁾

幼児期の運動習得には、仲間との遊びの中で新しい運動を習得する方法と、保育者、教育者からの指導により習得する方法があり、「指導されないで自由に習得する」ことを自由習得という。子どもは友達の動きを模倣したいという衝動から、友達と交流し、試行錯誤しながら新しい動きを習得する。しかし、近年、仲間、時間、空間の減少から、子どもの環境世界が大きく変化した。そのため、生活の中で自然に運動を発生させる機会が乏しくなり、自由習得によって新しい動きの獲得が難しくなりつつある。その影響から5歳になっても一段ごとに足を揃えなければ階段を降りられない等、身体の実行が未熟な幼児が増えていることが報告されている。このような現状においては、幼児教育施設での体系的な運動指導が期待される。

一般に、子どもの運動は加齢や体格また、生理学的な発育に伴って発達していくと考えられているが、その発生過程は複雑で個人差があり一様ではない。その上、幼児期の運動発生は＜受動発生＞が特徴で、幼児は全く自覚のないまま、いつの間にか自然に動けるようになることから、保育者や教育者は運動指導に関する高次の専門能力が求められることになる。

今後の幼児運動学の発展を目指し、本フォーラムではこれまでの研究を通して、幼児が運動課題や年齢に応じてどのような運動形態を発生させるか、またその運動発生過程について発表する。

1) 教育学部こども教育学科